

陳舜臣さんを語る会通信

NO.35

Apr. 2021

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2021年4月20日

「あなたはいったい、いつどんな用で、どこへ行ったのですか？」

マルコポーロに問いかける気持ちで執筆、『小説 マルコ・ポーロ 中国冒険譚』

文春文庫版『小説 マルコ・ポーロ』
「まえがき」を引用しながら、いくつかのポイントを拾い上げてみましょう

①マルコがフビライの寵臣になった経緯

一二七一年、蒙古の世祖フビライは、国号を『元』と改めた。

おなじ年、遙かヨーロッパは水の都ベニスのまちをあとにして、東へむかった三人の男がいた。ニコロ・ポーロ、その弟のマッフェオ・ポーロ、そしてニコロの息子マルコ・ポーロである。男というがマルコは十七歳にすぎなかった。

商人ニコロとマッフェオ兄弟にとって、これは二度目の東方旅行であった。十八年まえ、北京でフビライに歓待され、今回の旅行も、その時のフビライとの約束を果たすためのものであった。

マルコたちは、途中、エルサレムで聖油をもらい、陸路、シルクロードを東進、カシュガル、ホータン、楼蘭、敦煌を経て、四年近くもかかって、一二七五年、やっと元の都、大都（北京）にたどり着きます。

マルコは語学の天才であったとみえて、旅行中にペルシャ語（これは当時のモンゴル帝国の共通の教養後であった）、トルコ語、モンゴル語を完全にマスターした。（中略）しかも彼は整った容貌のもち主で

あったという。フビライが、この利発な美青年に目をつけたのはとうぜんであろう。
——わしの側近に仕えよ。
と、フビライは命じた。



文春文庫版表紙

②マルコ・ポーロは公儀隠密？

ここで注意すべきことがある。どのような重要な要件で、いつ、どこへ行き、どんなふうにもぐとに使命をはたしたか、そのいきさつについてマルコ・ポーロはいっき口を噤んで（しづめて）いることだ。

どこへ行ったかについては、『東方見聞録』のなかに登場する地方であろうから、いくらか察しがつくが、時代や用件や経過などはさっぱりわからない。（中略）

マルコ・ポーロの名はあの浩瀚（こうかん）な『新元史』のどこにも登場しない。マルコが法螺（はら）を吹いたとは思えない。さっぱりわからないと述べたが、じつはマルコの帰国のときの最後の役目だけはわかっている。イル汗国のあるジアルグン汗の妃となるベキコカチン姫を、海路、イランへ送り届けることであった。（中略）

そこで、わたくし推理するに、マルコ・ポーロがフビライのもとではたした役目は、わかりやすくいえば隠密的なものではなかったろうか。徳川幕府でいえば公儀隠密、「お庭番」である。これ以上に重要な役目はすくないのだが、正史の記述からは、その仕事もたずさわった人物の名も消し去られる。いや、はじめから記録されない性質のものであろう。

③マルコの勤務評定は？

各地に派遣された役人が、使命をはたして帰るだけでは、フビライは満足しなかった。その地方の事情について、どこまかに報告しなければならぬ。それが疎略（そりゃく）であつたり、面白くなかつたりすると、フビライは激怒（げきど）して、

——ここな大間拔けの能なし豚め！
と、口汚く罵（ののし）つたのである。

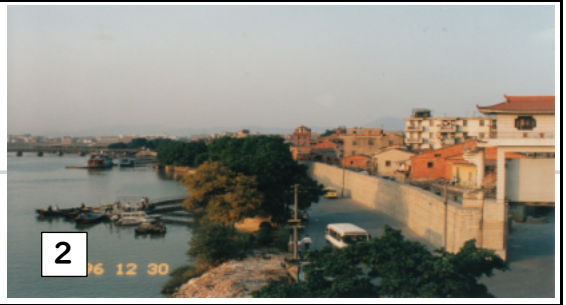
このことではマルコ・ポーロは合格点以上をとった。いや、満点といってよかったかもしれない。彼の観察はするどく、そして正確であつた。また超人的な記憶力をもっていた。彼は語学の天才であつたが、あらゆる語彙（ごい）を駆使し、おもしろおかしく物語ることにかけても天才であつた。

（中略）

歴史学者は根拠のないことを推測によって論じることにはできないが、小説家は、あれこれと推理し、想像することが許されている。これは「小説」なのだ。

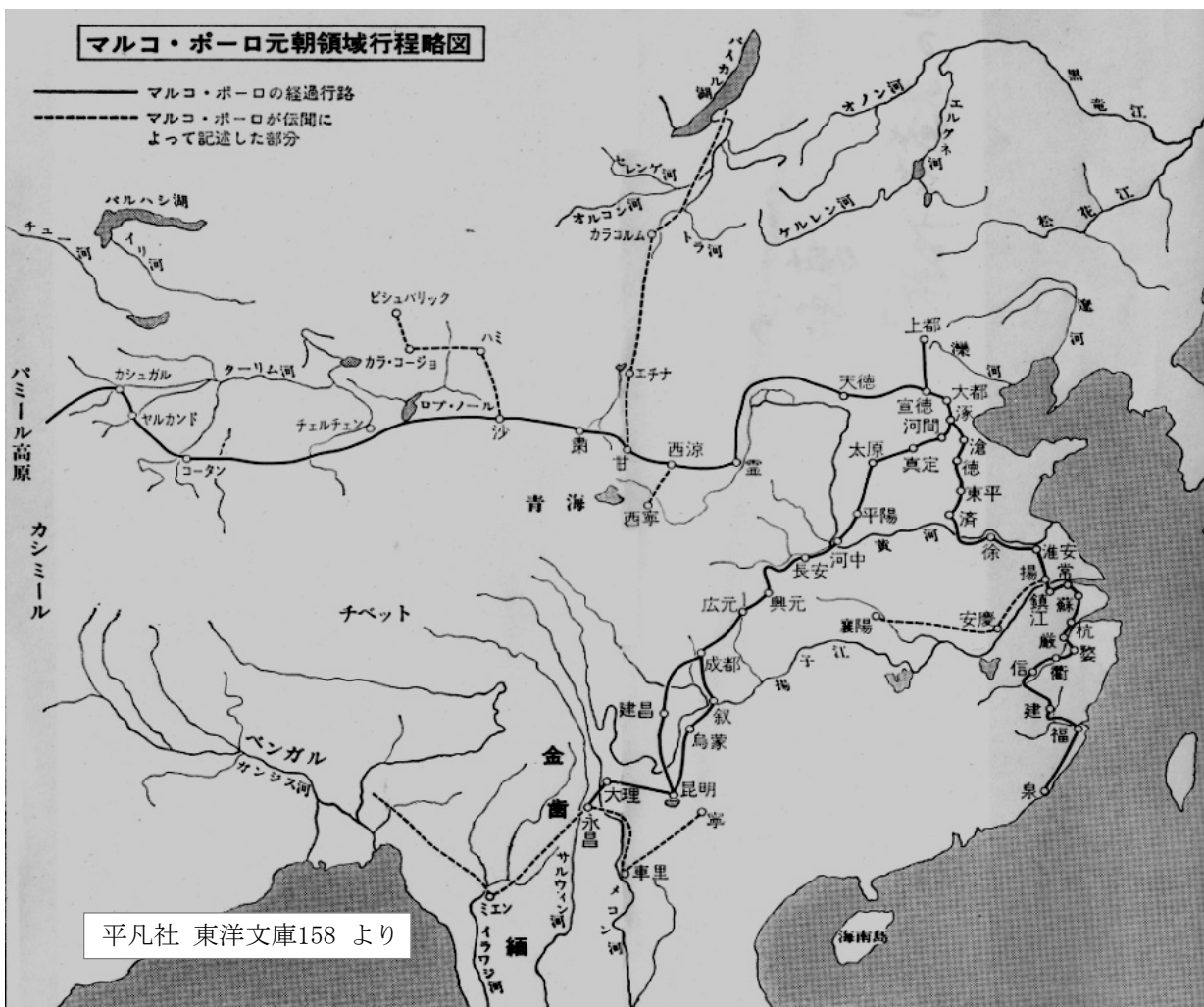
『小説 マルコ・ポーロ』章ごとの要約

『小説 マルコ・ポーロ』は10の章からなっています。初出は月刊誌『オール讀物』で、1978年2月号から、7月号と9月号を飛ばし、1979年1月号まで連載されました。下に章ごとの要約を挙げます。(編集委員 橘雄三)

章	内 容	
冬 青 の 花 咲 く 時	1278年、マルコは、楊璉真加(ようれんしんか)の弟子・巴念速(パニエンス)と浙江へ。舞台は 紹興 、雲門山系の一つ、宝山の麓にある南宋諸帝の陵墓。 話は、楊璉真加のことば、「大元安泰のため、南宋諸帝の遺骨を他の地へ移し、頭蓋骨を除き去らねばなりません」から始まる。 おびただしい人夫が集められ陵墓破壊工事が進む。とここで、楊璉真加と巴念速のねらいは、墓室の目もくらむような財宝にあった。	
移 情 の 曲 違 し	1278年、マルコはフビライから、兵船の建造など、日本遠征準備の進捗状況調査と宋朝滅亡のもよみの記録作成を命じられ南下。 南宋最後の舞台は 広東、珠江デルタ一帯 。亡命政権を支えるのは、内では張世傑、陸秀夫、外にあっては文天祥。やがて文天祥は捕らわれ、マルコは 潮陽 (今の 汕頭 スワトウ)で文天祥と会見する。同道して 厓山 へ。亡命政権の最後を見とる(1279年)。	
電 光 影 裡 を 斬 る	広東からの帰り、汪大有に頼まれた、無学祖元(むがくそげん)を探するという半ば私用で 慶元 (今の 寧波 ニンポウ)へ。行動を共にするのは徐長風という汪の友人。徐は仏教界に詳しいというが、日中貿易も視野に入れる大商人。どちら側の人間？ 南宋の朝廷は、日本の執権北条時宗の使者から、病床にある蘭溪道隆の後任招聘を依頼されていたという。依頼に応えられる名僧といえ、無学祖元をおいて他に人はない。 またしても楊璉真加登場。彼も無学祖元を探している。その意図は？その他、日本遠征反対派の活動などが絡んで筋は進む。	
燃 え よ 泉 州 路	『東方見聞録』では、 泉州 は「ザイトン」の名で出ており、「アレキサンドリアと並ぶ世界の二大貿易港の一つである」と記されている。造船技術も中国一で、フビライは、泉州に日本遠征用戦船600艘の3分の1、200艘を割り当てる。そしてその戦船建造状況調査が、マルコに課せられたミッションであった。 泉州一の経済力を持ち、福建地方政府においても高いポストにいたのがアラビア人、蒲寿庚(ほじゅこう)であった。しかし、年齢とともに、蒲氏一族内での指導力は低下、蒲寿丁ら野心勢力を抑えきれなくなっていた。 この一族内の対立に起因し、殺人事件が起きる。また、ここでも、日本遠征反対派が絡んでくる。この章は、ミステリー作家としての陳舜臣さんの腕が一段とさえます。	
南 の 天 に 雲 を 見 ず	この度、マルコがフビライから与えられた任務は、第二次日本遠征用の戦船建造が、 洞庭湖 周辺の造船所で順調に進んでいるか、調査することであった。任務は終わり、マルコは 岳陽 のまちにいた。 歌妓を伴い洞庭湖に船を浮かべている時、一艘の船に衝突され、マルコは湖面に放り出される。漁船に救助されて湖岸の村に着く。 このあと、話は、元軍の侵攻に抵抗した宋の洞庭艦隊の司令官、方慶濤の夫人が絡み、武陵桃源郷や浦島伝説のようなストーリーが展開していく。	
蘆 溝 橋 暁 雲 園	1280年、マルコは 大都 、蘆溝橋のそばの宿舍暁雲園で、すでに第二次日本征討の司令官に任命されている范文虎とむかい合っていた。この宴には一人の美女王綺児が侍っていた。王綺児は、もと襄陽の名妓であったが、ここ十年、范文虎の女になっている。このとき、范文虎はマルコに二つの願いごとをする。一つは、王綺児を預かってほしいということで、もう一つは、フビライに道教の保護を進言してほしいということであった。続いて、范文虎と王綺児の馴れそめが詳述される。 あと、北京城地下牢にいる文天祥のこと、黄金の国日本のこと、道教の最高位正一天師の「神仙の言」などを挟みながら話は進むが、王綺児が想い人、郭佐祥の生存を知ったところで、話は本筋に戻る。	

『小説 マルコ・ポーロ』章ごとの要約（続） 及び マルコ元朝領域行程略図

白い祝宴	1281年8月の「日本征討軍の全軍覆滅」という出来事は、しばらく大都で一番の話題となった。話は、生きて戻った兵士2人の、笛と琵琶を伴奏にしての語りから始まる。特に、笛の素晴らしさは評判となる。 翌年正月、普通、「白色の祝宴」といわれる「元正受朝儀」で、生還した一人の征討軍将校が殺されるという事件が起きる。犯人は、そしてその動機は？
明童真君の壺	景德鎮窯の白磁より、竜泉窯の青磁が好まれるようになり、腕のいい陶工は景德鎮を見捨て、竜泉窯へ移った。国家財政を担うアフマドは、コバルト鉱を顔料に、景德鎮の白磁の「白地を生かす青」という着想を得て、マルコに景德鎮での研究をもちかける。 マルコは承諾、景德鎮へ。土地の名工・趙茂と工夫・研究の末、高温で焼かれた薄く強靱な染め付けの薄胎を完成させる。土地の人びとはそのできばえに驚嘆、「明童真君の壺」と呼ぶようになる。 ここに楊璉真加が登場、その所有する「吉祥天母の壺」と破邪の力を競うことになる。
男子、千年の志	1282年の大都で王著らによるアフマド暗殺事件が起きる。本題に入る前に、こちらが詳述される。 マルコ、大都に宅地を賜る。同じ年、この邸の井戸掘り作業に関連し、本題の事件が起きる。邸の建築現場から地下道を掘り、獄中の文天祥を救出するという企てが進む。この企ての黒幕は大都改造顧問の留夢炎とわかる。その意図は？この企ては失敗に終わる。文天祥は1282年12月、処刑される。
獅子は吼えず	1284年、元の侵攻にチャンパ(占城。南ベトナム)は屈服し和を結ぶ。翌年、マルコは、20頭の象などの貢品受けとり、並びに交易監督の命を受けチャンパへ。 この時の象一頭を安西王(フビライの孫アナンダ)に届ける使命を受け、安西路(その前の京兆府、今の西安)へ。ここで、安西王に楊璉真加の弟子との獅子調伏合戦を強いられる。



十七年にわたる中国滞在のあいだ、マルコ・ポーロは、国内の各地(左図)を旅行しただけでなく、すくなくとも国外へ二回出ている。いずれもフビライの命令によったもので、行先はチャンパ(南ベトナム)とインドであった。

『小説 マルコ・ポーロ』いくつかの補足

《1. マルコ・ポーロは狂言回し》

本通信では、『阿片戦争』『太平天国』『山河在り』『桃花流水』等々、ちょっと堅い中国歴史ものを多く取り上げてきましたが、『小説 マルコ・ポーロ』は、ミステリー仕立ての一話完結型短編10話からなる娯楽要素の強い作品です。

ところで、題だけを見ると、マルコ・ポーロを主人公とする冒険譚のようですが、そういう場面は少なく、どちらかという、マルコ・ポーロは狂言回しと言ったほうが当たっています。

いずれにしても、歴史とフィクションを一体にして、読者を引き込んでいく筆力はさすがです。

《2. マルコ打倒を狙う楊璉真加^{ようれんしんか}》

悪事を企む楊璉真加にとって、好漢マルコは、何かと邪魔な存在。自らは、できるだけ後ろにいて、弟子を使い、打倒マルコの機会をうかがっているのです。



杭州西湖靈隱寺の傍ら、飛来峰にある楊璉真加石像
kknews.cc/history より

なお、維基百科に、「楊璉真加在飞来峰雕凿佛窟，同时也雕凿了自己的供养像」の記述があります

楊璉真加は「冬青の花咲く時」「明童真君の壺」「獅子は吼えず」などの章で登場します。いずれも、マルコ・ポーロの勝利で終わります。ただ、『小説 マルコ・ポーロ』では、楊璉真加の進退去就を決するところまでは書かれていません。

楊璉真加は実在で、悪名の高い人物です。集英社文庫版『チンギス・ハーンの一族 IV』（p. 307-08）でも、かなり詳しく出てきます。南宋諸帝の陵墓をあばいて巨利を得るくだりです。一部引用します。

楊璉真加はこの大規模な墓あらしで巨利を得た。金千七百両、銀六千八百両、その他玉器、大珠などである。田は二万三千畝で、税賦を納めない百姓は二万三千戸、彼らは楊璉真加には納めていたのだ。これはのちに官物盗用で失脚したときにわかったことである。

《3. 陳さんは手並み鮮やかなマジシャン》

次に、講談社『陳舜臣全集 第八巻』「小説マルコ・ポーロ」に寄せた稲畑耕一郎氏の解説から引用します。

「冬青の花咲く時」に描かれるラマ僧楊璉真加による陵墓の盗掘なども、実際にあった史実である。「燃えよ泉州路」に登場するアラビア人豪商蒲寿庚（ペルシャ人だったという説も近年は有力である）が、元の側についたことが、南宋の滅亡を早めたのも、確かにマルコが“中国”にいた時期のことであった。この時、文天祥が捕えられて大都に送られ、遂に膝を屈することなく、刑に処せられたが、その史実は、「男子、千年の志」に描かれている。

ある時には『見聞録』の記述を用い、またある時には『宋史』『元史』『元朝秘史』の記述を用い、その間を自分自身の創作で埋めてゆく。陳舜臣の「物語」創作のために、歴史資料を活用してゆくさまは、まるで手並み鮮やかな手品を見ているようである。

本号2頁、3頁使用画像の補足説明

- ① 南宋皇帝陵墓
浙江省紹興東南の地 画像は twgreatdaily.com より
- ② 泉州は晋江河口近く左岸にひらけた港町。南宋～元代に最盛期を現出。画像は編集委員撮影
- ③ 盧溝橋（マルコ・ポーロ・ブリッジ）■陳作品では「蘆」
画像は pacificafe.com/china-rokoukyou より
- ④ 景德鎮街並み
画像は jp.trip.com/travel-guide/jingdezhen-405 より



宋陵墓遠景 3g.163.com より